

保護者と学習状況を共有し、受け身ではなく「自ら取り組む」家庭学習へ

小学校の段階で自ら学習する姿勢が身に付けば、その後、生涯にわたって学び続ける大きな力となるに違いない。東京都杉並区立堀之内小学校の渡部公威校長と、同校教諭の竹内不二子先生に、家庭学習の充実を図る上で欠かせない保護者との連携の方法などについて、ベネッセ教育総合研究所 初等中等教育研究室の木村治生室長が聞いた。

●家庭学習の実態と課題

保護者の多忙さや意識が家庭学習への姿勢に影響

木村 本日はよろしくお願ひします。最初に、家庭学習を充実させる上で課題と感じていることをお聞かせください。

渡部 家庭学習の目的は、授業で学習した内容の習熟に加え、学習習慣の定着を図ることにあると考えています。特に、子どもが自ら学ぶ習慣を付けることを重視していますが、実際には「宿題だからやる」という受け身の姿勢がなかなか抜けません。低学年のうちから、短時間でも自主的に学ぶ習慣が付くように指導することが大切です。

木村 学習に向かう姿勢は個人によって差が

大きいと思いますが、その点はどう捉えていますか。

渡部 公立小学校における共通の課題だと思いますが、低学年の段階から家庭での学習内容や量については個人差がかなりあります。要因の1つと考えられるのは、保護者の子どもへの接し方です。学習に対する考え方は家庭によって異なりますし、共働き家庭の増加によって、子どもの学習を支援する時間的余裕を持ってないケースも見られます。特に、低学年の時期から、子どもに励ましの声を掛けたり、「一緒にやろう」という態度を示したりして、保護者が「見守る存在」になることで、子どもの意識は前向きになります。こうした点を踏まえて、保護者にアプローチする必要性を感じています。

前向きな気持ちを育て自ら取り組む意欲を引き出す

木村 ベネッセ教育総合研究所と朝日新聞社が2012年に共同実施した「学校教育に対する保護者の意識調査」を見ると、ここ10年程で、子どもの家庭学習時間は伸びているという結果が出ています。しかし、学習は、量だけでなく、質も重要です。「言われたからやる」学習ではなく、「自分からやりたくてやる」学習へと導くのは、なかなか難しいことだと感じます。

渡部 私もそう思います。やはり、どれだけ長時間、机に向かったとしても、「宿題だから」という気持ちでは学習効果はあまり望めません。自ら学ぶ意欲を育てるためには、学

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

東京都杉並区立堀之内小学校校長

渡部公威

わたなべ・こうい ◎東京都公立小学校教諭、杉並区立富士見丘小学校教頭、国立市立国立第五小学校校長、台東区教育委員会指導室長などを経て現職。



東京都杉並区立堀之内小学校

竹内不二子

たけうち・ふじこ ◎4学年担任。講師・産育休代替教諭として学級担任を経験後、現職。



東京都杉並区立堀之内小学校 ◎教育目標は「考える子ども、やりぬく子ども、助け合う子ども」。2010年度に「コミュニティ・スクール」に指定され、地域と一体感のある教育活動に力を入れる。児童数448人。

校の授業の内容に興味を持たせることが最も大事だと思えます。その日の授業を振り返り、「この問題も出来るかもしれない」「ここをもう少し調べてみたい」といった思いを持って、自分から学びに向かうからです。

木村 授業と家庭学習をどう結び付けるかが、自ら学ぶ姿勢を身に付ける鍵となるのではないかと考えます。授業との関連で家庭学習をどのように位置付けるか、よく検討する必要があります。

竹内 家庭学習では、基礎・基本となる学力の定着を目指して授業を補う学習をさせることが多いと思います。特に、低・中学年は自分で課題を見付けることが難しいので、読書、音読、漢字や計算の練習といった宿題が多くなります。例えば、国語の授業では読解などに重点を置くため、音読や漢字の習熟についての時間を授業中に十分に確保することは難しくなるので、宿題として家庭で学ばせます。そのような学習の積み重ねがなければ、基礎・基本は定着しないと思えます。

宿題はどうしても「言われたからやる」という意識になりがちですが、前向きな気持ちを持たせる工夫は出来ると思います。今、私は4年生の担任をしています。クラスでは宿題を提出したら自分で丸を付けるチェックシートを活用しています。簡単な方法ですが、丸が付いていない子どもに「今日はどうしたの？」と一声掛けるだけで、「やらなくては

ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室 室長

木村治生

きむら・はるお ◎ベネッセコーポレーション入社後、初等・中等教育領域を中心に子ども、保護者、教員を対象とした意識や実態の調査研究などを担当。文部科学省や経済産業省、総務省から委託を受けた調査研究にも数多く携わる。



いけない」という意識が芽生えます。また、漢字の定着を図る時は、学力差を考慮するため、最初に小テストを実施し、その結果を基にして、子ども一人ひとりに目標を設定します。小テストの前日にはテスト範囲を宿題にすれば、「合格点を取りたい」と思い、子どもたちは頑張って宿題に取り組みます。

木村 目標を持たせることによって、宿題に対する姿勢を変えるわけですね。

竹内 そうです。仕事で遅い時間に帰宅する保護者は、子どもの学習を見てあげたいという思いはあっても、なかなか実行できません。それでも、子どもから「明日、小テストがあ

るから、ここを教えて」と言われれば見てあげようという気持ちになるでしょう。そのように、子どもが学習に意欲を持つと、保護者に対して言葉や態度で自然に働き掛けるようになります。そうすると保護者にも、「子どもが頑張っているから支えてあげたい」という意識が生まれます。

家庭学習の課題設定を工夫し 次の授業への期待や意欲を高める

木村 そのほかに授業と家庭学習をつなぐ観点から指導の工夫についてお聞かせください。

竹内 基本的な指導で心掛けているのは、家庭学習に授業と授業をつなぐ役割を持たせることです。例えば、4年生の算数の授業で、平行線の引き方を学んだとしましょう。その日の宿題は、平行線を引く練習にします。そして、翌日の授業では、家で練習してきた平行線の引き方を活用し、平行四辺形の学習に入ります。特に、算数などはスモールステップを積み重ねて学び進める教科ですから、授業の内容をその日の家庭学習で習熟させて、次の授業につなげるようにしています。

渡部 家庭学習で予習的な学習に取り組みせて、次の授業への期待感や意欲を高める指導も考えられると思います。

竹内 予習的な学習は、社会などでよく取り入れています。例えば、事前に自宅にある外国製の製品をリストアップしてもらい、授業

で世界と日本のつながりを考える材料にするといった学習です。

木村 子どもの学力差に応じて宿題を個別に設定することは、現実的には難しいものなのではないでしょうか。

渡部 漢字や計算の練習など習熟のための宿題は、一律に行うことが大半です。しかし、漢字の意味調べなどは、同じ課題であっても、子どもによって取り組み方は異なります。一生懸命に長時間を掛けて調べる子どももいれば、サッと終わらせてしまう子どももいます。そのような違いから、子どもの姿勢や関心を把握して手立てを考えることが出来ます。

竹内 子どもは、課題の種類によって得手不得手があります。一律にすると負担感が異なるため、音読であれば、読む回数は自分で決めるようにして個人差に対応しています。

木村 長期休業中は、普段とは家庭学習の性質やねらいが変わると思いますが、どのような指導をされていますか。

渡部 長期休業中は、工作や研究などにじっくり取り組めます。自由研究について、事前「こんなテーマがあるよ」と提示すること興味・関心を深めています。

竹内 長期休業中には、普段体験できないことにとことんチャレンジしてほしいと思っています。さまざまな体験を通して豊かな気持ちになり、自分の好きなことややりたいことを見付けることが、生涯教育の基盤になると

思うからです。

●保護者に期待する1つ

低・中・高学年で異なる 家庭学習における保護者の役割

木村 先ほど保護者への支援が必要というお話がありましたので、その点について掘り下げてお聞きしたいと思います。まず家庭学習について、保護者にはどのようなかわり方を期待しているのでしょうか。

渡部 それは、子どもの発達段階によって違うと思います。低学年の保護者には、「一緒に取り組む」ことを特に期待しています。子どもが学習したり読書したりしている時に、保護者が同じ時間を共有しようとする態度を示すと、子どもの関心が深まるからです。

中学年では、家庭での学習状況を把握し、面談や連絡帳などを通じて、担任と共有することを心掛けていただきたいです。次第に学習内容が難しくなり、保護者が子どもに教えられない場面が出てくることや、「子ども一人で学習させて自立させたい」といった思いから、子どもの学習にかかわらなくなる保護者が増えてくるのですが、子どもの家庭学習に関心を持つことは大切です。

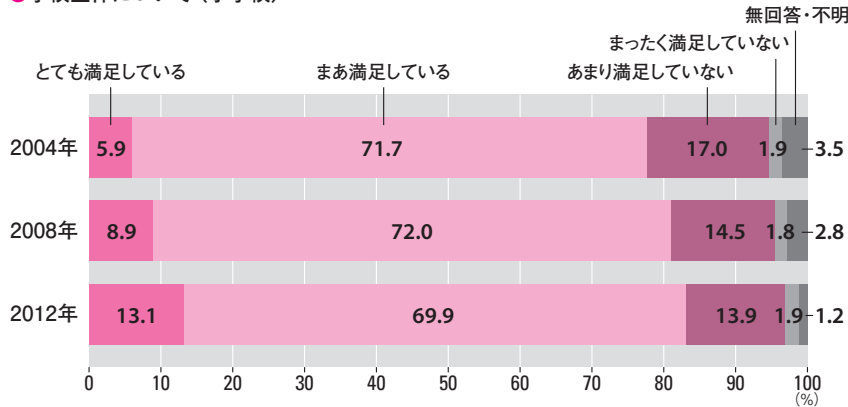
更に、高学年では、思春期に差し掛かることもあり、多くの大人がかかわる必要が生じます。保護者にも、心配や不安があれば、担任だけではなく、学年の他の先生に相談した

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

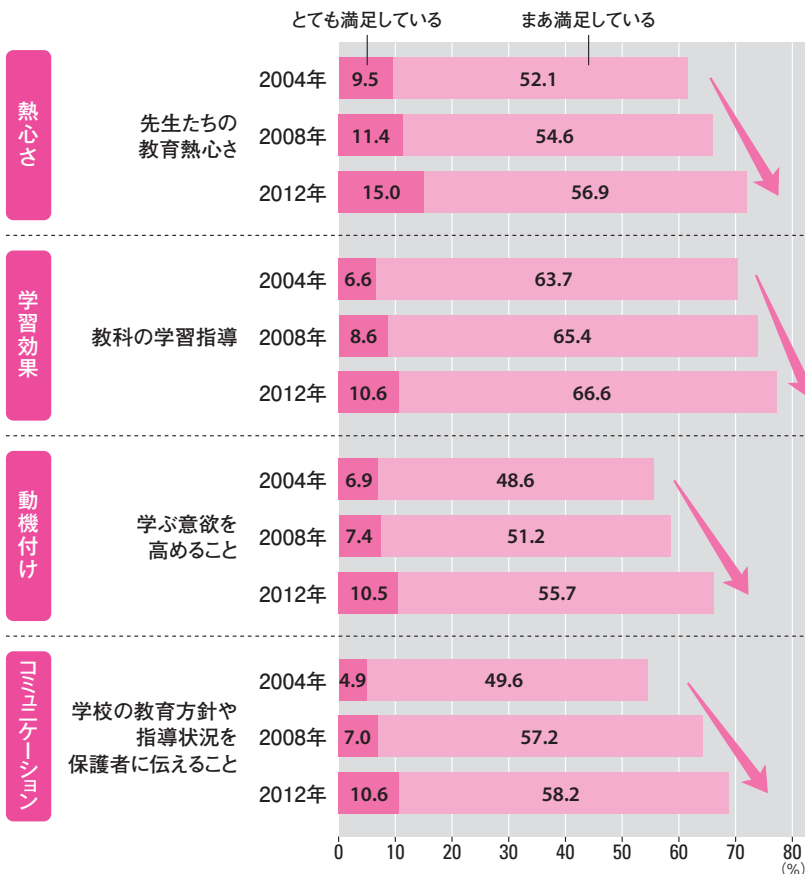
図1 学校に対する保護者の満足度

Q. あなたは学校の取り組みに対して満足していますか

●学校全体について（小学校）



●個別の取り組みについて（総合満足度と相関の高い上位4項目）



保護者の小学校に対する満足度は、2004年度から、調査を重ねるごとに高まっている。先生たちの熱心さが伝わり、学習指導で成果を上げ、子どもを動機付け、そうした取り組みの様子をきちんと保護者に発信することが、学校に対する信頼につながっている。

出典／ベネッセ教育総合研究所、朝日新聞社共同調査「学校教育に対する保護者の意識調査2012」
学校通しによる家庭での自記式質問紙調査／全国の公立の小学2年生、小学5年生、中学2年生を持つ保護者（2004年は6,288人、08年は5,399人、12年は6,831人が対象）

り、アドバイスを求めたりすることが出来ることを伝えています。

●保護者との関係構築に向けて

保護者と家庭学習状況を共有し個別指導につなげる

木村 家庭学習に限りませんが、保護者の協力を得るためには、まず学校に対する信頼感を得ることが重要です。

その点で興味深いデータがあります。冒頭で触れた「学校教育に対する保護者の意識調査」では、ここ10年程で、保護者の小学校に対する満足度は高くなっています（図1上）。満足度と相関が高い取り組みは、「先生たちの教育熱心さ」「教科の学習指導」「学ぶ意欲を高めること」「学校の教育方針や指導状況を保護者に伝えること」であることも分かりました（図1下）。こうした保護者の意識

変化は、小学校の努力の賜物たまものといってよいでしょう。その一方で、現場の教師が、多様な家庭への対応に苦慮している様子がかがえます（P.8図2）。家庭への対応において、工夫されていることをお聞かせください。

渡部 学校と保護者が学習内容を共有することがポイントだと考えます。低学年のうちから、保護者が子どもの学習に関する習慣を付けておくのです。その上で、学校が保護者

図2 家庭学習に関する取り組みと課題

取り組みの内容	課題
家庭学習の手引きの配布	・保護者に意識のばらつきがあり、一律にはお願ひしにくい
連絡帳の活用	・一人ひとりの提出物に丁寧なコメントを書く と時間が掛かる
本読み、漢字、算数(計算)の宿題	・子どもの学力差に対応しきれない
「自学」の推進(ノート作成)	・ノートの確認に時間を要する
懇談会や学校・学年だより、ホームページでの情報発信	・ICT環境の違いのフォローが必要 ・本当に伝えたい保護者には伝わらない

家庭学習の手引き作成、連絡帳の活用、習熟中心の宿題、自学ノートなどによって、家庭との連携を図っている。しかし、保護者の意識のばらつきや、丁寧な宿題指導には時間が掛かるという課題が顕在化している

* [VIEW21] 小学版読者モニターアンケート結果を整理して掲載

から子どもの家庭学習の状況について話を聞く機会を設けると、個々の学習支援に生かせると思います。例えば、子どもが宿題をしなかった理由は、「時間がなかった」からなのか、「課題が難しすぎた」からなのか、保護者から子どもの様子を聞くことで次の指導に生かされます。

また、保護者に音読を聞いてもらう宿題でも、単にチェックカードに丸を付けるだけでなく、「漢字に詰まることがあったけど、最後まで読めた」「以前に比べて滑らかに読めるようになった」などコメントを添えても

例えば、家庭での学習状況を把握できますし、子どももそのコメントを読み、自信を付け、「次も頑張ろう」と思えることに結び付きます。

竹内 学習に苦手意識を持つ子どもは、家庭学習もおろそかになりがちで、ちょっとした課題にも時間を掛けてしまうことがあります。そういう時こそ、保護者の協力が大切だと思います。学校と保護者が子どもの苦手分野を共有しておけば、学校と家庭でフォローしやすくなります。

家庭で育む「生活力」を基盤に 学力と体力を伸ばす

木村 保護者を巻き込むことの大切さが伝わってきました。それでは、学校が保護者とのコミュニケーションを深めるためには、どのような働き掛けが効果的なのでしょうか。

渡部 本校では、年度初めの学校説明会で教育の根底にある考え方を説明し、同じ目線で子どもを育てるように努めています。具体的には、学校は子どもの学力や体力を伸ばすために精一杯努力をしますが、その基盤となる

「生活力」の向上は家庭の協力が不可欠であることへの理解を求めています。家庭生活や教育環境を整え、心を安定させなくては、子どもが安心して学びに向かうことは出来ないからです。また、基本的な学習規律や授業の進め方など、全学年共通のルールを定め、ど

のクラスでも共通の指導をしていることをアピールし、学校に対する信頼感を醸成するよう努めています。

竹内 子どもと同様に、保護者の意識も違うことは当たり前です。それを踏まえ、年度初めに、毎日宿題を出すから出来る限り支援をお願いしたいことなど、家庭学習の方針について共通認識を図るようにします。最初に理解を促しておくことで、家庭の協力は得やすくなります。

地域と一体化した学校づくり

本音を隠さずに伝えることから 協力関係が生まれる

木村 保護者の話を聞くために、どのような機会を設けていますか。

渡部 保護者との二者面談を大切にしています。本校では、以前は2学期に行っていましたが、出来るだけ早い時期が良いと考え、5年ほど前から夏休みの初めに実施しています。ここで保護者から子どもの様子や悩みをじっくり聞き、2学期からの指導に反映させています。

竹内 面談を通じて家庭での様子を伝えてもらうことで、子どもへの理解は深まります。保護者には、日ごろから連絡帳などを活用し、ちょっとしたことでも情報を共有してほしいと話しています。

渡部 保護者と目線を合わせるには、学校と

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす



保護者が、言いづらいことも本音で伝え合う必要があります。互いに良いことだけしか言わなければ、子どもが置き去りになって適切なフォローが出来なくなります。

竹内 包み隠さずに状況を伝え合うことは、とても大切だと思います。以前、クラスが落ち着かなかった時期に、保護者会で「学級が

大変な状況であること」「学校の教育力に至らない点があったこと」などを話し、家庭でも気になることは注意をしてほしいなど協力を求めました。すると次第に、クラスは落ち着きを取り戻しました。子どもにも課題があったとしても、それを前面に出して話すと、保護者は責められていると感じてしまいます。最初に学校側が至らない点を認めたことで、保護者も心を開いて、共に問題に取り組む協力関係が築かれたのだと思います。

心強い「応援団」である 保護者や地域の知恵を借りる

木村 保護者を含む地域との連携において力を入れていくことは何でしょうか。

渡部 本校はコミュニティ・スクールとしての取り組みを進めています。それがそのまま直接的に学力や体力の向上につながるかは考えていません。しかし、学校という枠だけで完結せず、毎日通う地域の方々に見守られているという実感は、「この地域に生まれて良かった」といった気持ちの安定につながります。それによって子ども同士の間関係が良くなったり、学習に集中できたり、さまざまな利点があります。

学校運営協議会は、困ったら駆けつけてくれる応援団のような存在で、とても心強いです。学校として、困っていることを伝え、地域の皆さんと一緒に子育てを育てたい

と考えています。

木村 最後に、校長先生をはじめ、管理職の先生方に求められる心掛けについてお話しください。

渡部 知恵を出してくれる保護者や地域住民がたくさんいることを忘れないようにしています。協力関係を深めるためには、学校が正直になって、「悪い情報ほど先に出す」という態度が大切だと思います。

また、校長として、担任による指導の差が生じないように配慮しています。例えば、学年で宿題の量などを相談し、学級の足並みをそろえています。本校は教科担任制を導入していますが、これも学級間のばらつきを緩和する効果があり、保護者に支持されています。杉並区では、保護者や子どもに学校満足度のアンケートを実施しており、本校の肯定率は89%です。一見高い数字と思えますが、むしろ少数でも否定的な回答があることに注目しています。保護者には結果を伝え、共に学校づくりを考えるきっかけの1つとしてもらっています。

木村 保護者や地域と手を携えて子どもを育てるという思いがよく伝わってくるお話でした。当研究所でも、学校でのご指導に役立てていただけるよう、引き続き、児童や保護者の実感や意識について調査・研究・発信を行っていきたいと思います。本日はありがとうございました。